

資 料

学習性無力感と帰属スタイルに関する研究

大 芦 治* 青 柳 肇** 細 田 一 秋**

LEARNED HELPLESSNESS AND ATTRIBUTIONAL STYLES

Osamu OASHI, Hajime AOYAGI AND Kazuaki HOSODA

The reformulated learned helplessness theory predicts that individuals who make internal, stable, global attributions for negative outcomes (i.e. depressive attributors) are more likely to become depressed when confronted with uncontrollable failures. To test this hypothesis, depressive attributors and nondepressive attributors (individuals making external, unstable, specific attributions) were exposed to either a solvable or an unsolvable cognitive task. They were later tested on a solvable test task. The results partially supported the reformulated learned helplessness theory, i.e. the theory is to predict an unsolvable task significantly impaired the performance of both depressive and nondepressive attributors. On the other hand, contrary to the theory's prediction, depressive attributors showed significantly less impairment in their performance than nondepressive subjects regardless of the pre-treatment. Additionally, path analysis revealed that the stability dimension of attributional style was found to be mildly related to test performance.

Key words : learned helplessness, reformulated learned helplessness theory, causal attribution, attributional style, unsolvable task.

対処不可能な嫌悪刺激にさらされた被験者(体)が、後続の対処可能な学習場面においてもその学習が阻害される現象は、学習性無力感(learned helplessness; 以下、LHと略す)とよばれている。

このLHは、はじめは主として動物実験で確認されていた。しかし、後に、LHは、人の反応性うつ病(Seligman, 1972)や学業場面における達成動機づけの低下(Dweck & Reppucci, 1973)のモデルとして適用され、人のLHに関する多くの研究がなされた。

Abramson, Seligman, & Teasdale (1978)の改訂LH理論はこのような人のLHの研究の流れから提起された。それによると、人は対処不可能な場面で失敗を経験した場合、その失敗の知覚を行うと同時に、失敗の原因に対する帰属を行う。原因帰属の次元としては

内的(internal)―外的(external)、安定的(stable)―不安定的(unstable)、全体的(global)―特殊的(specific)の3次元が仮定されている。そして、失敗の原因を内的、安定的、全体的に帰属したとき、将来も対処不可能であるという期待が形成され、LHに陥ると考えられている。

後に、この失敗の原因を内的で安定的で全体的な次元に帰属する傾向は個人のうちに存するパーソナリティ特性(帰属スタイル)と考えられるようになった(Metalsky, Abramson, Seligman, Semmel, & Peterson, 1982)。そして、失敗の原因をより内的、安定的、全体的次元に帰属し易い帰属スタイルを持つ人ほど対処不可能な失敗経験によってLHに陥りやすいとされた。ここにおいて、LHは、帰属スタイルと対処不可能な失敗経験の組み合わせによって生起するものとされたのである。

この改訂LH理論の実証的な研究は、欧米では実験

* 上智大学大学院 (Sophia University)

** 早稲田大学 (Waseda University)

的方法 (Alloy, Peterson, Abramson, & Seligman, 1984), 学業達成場面を利用した実験的方法 (Metalsky et al., 1982) などさまざまな形でおこなわれている。

しかし、わが国における改訂 LH 理論の研究は、これまで主として質問紙法によって抑うつ傾向と帰属スタイルとの関係を検討することに限られており、実験的な方法で改訂 LH 理論を証明した研究はみあたらない。

したがって、本研究の目的は、これまでわが国でなされなかった改訂 LH 理論の実験的検討を試みることにある。すなわち、1) 実験的に失敗経験をあたえられた被験者は、失敗経験をあたえられない被験者に比べ、後続の解決可能な課題場面においても課題遂行の低下 (LH 効果) をみせる。2) 上記の LH 効果について、失敗経験をあたえられた被験者の中でも、失敗の原因を、内的で、安定的で、全体的な次元に帰属する帰属スタイルをもつ被験者の方が、より、LH 効果をみせやすい、ことを確認することにある。

方 法

被験者

埼玉県内の私立大学生217名 (男子105名・女子112名)

実験計画

2 (帰属スタイル; 抑うつ的, 非抑うつ的) × 2 (前処置課題の種類; 解決可能課題, 解決不可能課題) の実験計画が採用された。

まず、全被験者を LH に陥りやすい抑うつ的な帰属スタイルをもつ被験者、もたない被験者に2分した***。そして、それぞれの半数ずつを、対処不可能な解決不可能課題、もしくは、対処可能な解決可能課題のいずれかに配置した。従属変数としては、前処置課題に続くテスト課題における各群の遂行成績、および、前処置課題の前後での情動の変化、前処置課題に対する正答率の予想、前処置課題が失敗と判断されるならばその失敗に対する原因帰属、テスト課題における正

答率の期待が測定された。

材 料

帰属スタイルの測定尺度 被験者の帰属スタイルの測定にあたっては、Peterson & Seligman (1984) による Expanded Attributional Style Questionnaire (EASQ) の日本語訳 (成田・今田・新浜, 1990) が用いられた。この質問紙は22の否定的な失敗場面に対し、その失敗の原因を記述させ、その原因を、内的・外的、安定的・不安定的、全体的・特殊的の3つの次元に7段階の尺度で評定させるものである。そして、各場面での評定値の合計が、その被験者のその次元における帰属スタイル得点とされた。

前処置課題およびテスト課題 前処置課題としては以下に説明するような算数課題とアナグラム課題が用いられた。算数課題は4つの数字の間に演算子を入れることによって右辺の数字と等しくなるようにするものである (例, $3 \times 5 \div 2 - 9 = 21 \rightarrow 3 \times 5 \times 2 - 9 = 21$)。アナグラム課題は5文字の片仮名の順序を入れ換えることによって単語を作るものである (例, カンボアト → アカトンボ)。課題は用紙にこの算数課題とアナグラム課題が20題ずつ、計40題が交互に並べられており、すぐ右側の解答欄に記入するようにつくられた。このうち、解決不可能な前処置課題では、算数課題20題のうち12題に正答のない問題が混ぜられていた。解決可能な課題と解決不可能な課題は、この12問以外の課題 (算数課題8問, アナグラム課題20問) は、全く同一であり、同じ順番に配置された。

なお、この課題は青柳・大芦 (1990)、青柳・大芦・細田 (1991) で用いられたものと類似のもので、これらの研究においてこの課題が LH 効果を生起させるのに妥当なものであると確認されている。また、これまでの研究の予備調査から、被験者に解決不可能な課題の操作が気づかれないように、以下のような配慮がなされている。すなわち、課題を算数課題、アナグラム課題の2種類を混在させること。また、アナグラム課題は解決不可能な操作が気づかれやすいために全問解決可能な課題とすること、さらに、算数課題も12問のみを解決不可能な課題とし、残りの8問は解決可能な課題とすること、などである。

テスト課題も前処置課題と同様の形式の算数課題20問、アナグラム課題20問、計40問が用いられた。テスト課題は、算数課題、アナグラム課題ともに全問解決可能な問題である。

以上の課題を TABLE 1~TABLE 3 に示す。

実験中用いられた質問紙 実験中に用いられた質問

*** 全被験者を、LH に陥りやすい抑うつ的な帰属スタイルをもつ被験者と、もたない被験者に2分するにあたっては以下のような方法をとる。まず、後述する帰属スタイルを測定するための尺度、Expanded Attributional Style Questionnaire の3つの次元 (内的・外的、安定的・不安定的、全体的・特殊的) のそれぞれの得点を合計し、さらに、その合計得点を平均値で2分し、その高得点者を抑うつ的な帰属スタイルをもつ被験者、低得点者をそのような帰属スタイルをもたない被験者とする。Peterson & Seligman (1984) によれば、この分類法はこれまでの研究で一般に用いられている方法であり、本研究でもこれに従うことにする。

TABLE 1 解決不可能群の前処置課題

1)3 6 7 2=20	11)9 5 8 4=32	21)6 3 6 5=6	31)6 3 2 1=21
2)キダセイリ	12)マツウセオ	22)タワツリナ	32)トザクカウ
3)9 3 6 8=14	13)6 1 9 6=1	23)1 9 3 7=16	33)3 2 9 6=7
4)グマウルバ	14)マバコタテ	24)レハトマズ	34)カシツメイ
5)8 7 4 1=13	15)1 5 7 4=8	25)6 3 1 6=2	35)4 6 3 5=15
6)ツムタリカ	16)ノフキウト	26)ゲボウシカ	36)ムネガシメ
7)2 3 4 2=25	17)7 4 9 3=27	27)2 4 8 9=9	37)2 7 4 1=0
8)スリカグセ	18)トラウシガ	28)モイタカオ	38)コヒツネウ
9)8 4 6 5=25	19)4 9 1 2=34	29)3 1 7 5=3	39)1 5 6 3=17
10)イタテガホ	20)キイセカク	30)ヤマアドリ	40)ノケモマナ

TABLE 2 解決可能群の前処置課題

1)9 5 1 4=9	11)1 9 6 1=15	21)6 4 7 5=26	31)6 3 2 1=21
2)キダセイリ	12)マツウセオ	22)タワツリナ	32)トザクカウ
3)9 3 6 8=14	13)3 2 2 3=10	23)2 7 3 6=18	33)2 4 8 9=9
4)グマウルバ	14)マバコタテ	24)レハトマズ	34)カシツメイ
5)8 7 4 1=13	15)1 5 7 4=8	25)6 3 1 6=2	35)3 5 7 2=1
6)ツムタリカ	16)ノフキウト	26)ゲボウシカ	36)ムネガシメ
7)6 4 5 7=3	17)3 9 1 4=23	27)2 4 8 9=9	37)2 7 4 1=0
8)スリカグセ	18)トラウシガ	28)モイタカオ	38)コヒツネウ
9)2 7 6 4=7	19)4 9 1 2=34	29)8 1 6 4=10	39)7 2 5 1=17
10)イタテガホ	20)キイセカク	30)ヤマアドリ	40)ノケモマナ

TABLE 3 テスト課題の問題

1)2 5 5 2=4	11)9 5 3 6=18	21)2 1 2 9=20	31)6 1 2 7=2
2)ハツツマエ	12)ヨマウジツ	22)リベダスイ	32)トヒヨシオ
3)3 4 8 5=15	13)7 3 7 6=23	23)3 9 2 6=12	33)7 4 2 9=5
4)ドデケイウ	14)シトアオナ	24)イセブツビ	34)ザヒモオト
5)9 4 8 3=1	15)7 4 6 9=13	25)3 1 3 7=16	35)4 3 9 5=3
6)シタブワネ	16)ゾイウコレ	26)シウコモミ	36)アツタリヤ
7)1 9 2 3=4	17)4 8 1 9=2	27)3 7 5 6=44	37)7 5 9 8=3
8)シチルベミ	18)レガボナシ	28)ノラマキト	38)ウヤマハレ
9)1 9 2 3=4	19)9 3 5 1=17	29)6 5 2 4=5	39)4 8 1 3=10
10)マジワネシ	20)ネガムシコ	30)ワガラニイ	40)ラカクジタ

紙としては、①状態不安、抑うつ感、敵意・怒りの情動に関する（以下、「情動」と略す。）評定尺度、②前処置課題の正答率の判断（以下、「正答率の判断」と略す。）の評定尺度、③前処置課題に対する成功感・失敗感（以下、「成功感」と略す。）の評定尺度、④前処置課題の失敗に対する原因帰属（以下、「帰属」と略す。）の評定尺度、⑤テスト課題に対する正答率の期待（以下、「正答率の期待」と略す。）の評定尺度がある。

①の情動の評定尺度のうち状態不安尺度は、Spielberger の State-Trait Anxiety Inventory (STAI) の状態不安尺度の日本語訳（清水・今栄, 1981）の20項目が

用いられた。また、抑うつ感の評定尺度としては、Zung の Self-Rating Depression Scale (SDS) の日本語版（福田・小林, 1973）、および、日本語版 MMPI の抑うつ尺度より、現在の抑うつ感を反映しやすいと思われる項目（例「気分が沈んで憂うつだ」）を5項目選択した。さらに、敵意・怒りの評定尺度としては「腹がたっている」など5項目を作成した。以上の各項目は4段階で評定された。

②の正答率の判断の評定尺度は、前処置課題において何パーセントくらい正答できたかを問うもので、0パーセント～100パーセントの尺度上に5パーセント刻みで評定させるものである。

③の、成功感の評定尺度は、前処置課題において感じた成功感を4段階（「よくできた」～「よくできなかった」）で評定させるものである。

④の帰属の評定は、③において「よくできなかった」「どちらかといえばよくできなかった」のいずれかを評定した被験者に対して実施するものである。帰属の評定方法は帰属スタイルの測定において用いられた EASQ に準ずる形式のもので、失敗の原因の自由記述につづいて、内在性、安定性、全体性の各次元について7段階で評定させるものである。

⑤の正答率の期待の評定尺度は、もし、前処置課題と同じ形式の同程度の難易度の課題をひきつづいて行うとしたら何パーセントくらい正答できるかを問うもので、②の正答率の判断の評定尺度と同じパーセンテージによる評定尺度である。

以上のうち EASQ を除いた課題と評定尺度は、A 4 版の用紙に印刷され、実験の流れに沿う順番で1冊の小冊子に綴じられた。

手 続

実験に先立って、EASQ による帰属スタイルの測定が行われた。測定は教室で集団法によって行われた。時間は約30分を要した。

実験は、帰属スタイルの測定から2週間後に行われた。教室での集団法による実験である。被験者は教室に入室、着席の後ランダムに2群に分けられ、解決不可能群には解決不可能な前処置課題を含む小冊子を、解決可能群には解決可能な前処置課題を含む小冊子を配布した。

まず、氏名、年齢などを記入させ、同時に実験参加の意志の確認がなされた。また、実験は知能検査に類似した課題を実施するが、結果は統計的に処理されるもので個人の情報を得るための目的はないこと、個人の情報の保護は厳密に行われることなどが説明された。

そして、実験開始前の情動状態を測定するため、情動の評定尺度を実施した。

ついで、前処置課題の教示(解決可能群, 不可能群とも同一)が行われた。

まず、課題は「大学生の数的処理能力と言語的処理能力の統制」に関するもので、これまでの調査から一般的な大学生ならば十分に正答できるものであることがわかっていると説明された。そして、課題は表紙を開けると数的課題が20問、言語的課題が20問それぞれ並べられており、これを制限時間20分で解答することが告げられた。数的課題は、①4つの数字の間に $+$ $-$ $\times$ $\div$ の何れかの演算子をいれて、右辺の数字と等しくなるようにすること、ただし、②ルート、累乗などは使用できないこと、③() (カッコ) は用いてもよいこと、④4つの数字は入れ換えてはいけないことなどが、例を挙げて教示された。アナグラム課題については、5つのカタカナ文字を並べ変えて、実際に存在する単語を作ることが例を挙げて説明された。

教示終了後、質問を受け付けたがとくになかったもので、そのまま前処置課題に入った。

20分経過後、終了の合図が告げられた。そして、実験後の情動状態を測定するために、情動の評定尺度が再び実施された。約5分で全員が終了したので、そのまま、正答率の判断、成功感の評定尺度が実施された。さらに、成功感の評定において、「よくできなかった」、「どちらかといえばよくできなかった」のいずれかに評定したもののについては原因帰属の評定をするように教示された。以上、約5分間で全員が評定を終えたので、成功率の期待の評定が行われた。

つづいて、テスト課題の教示が行われた。つづけて課題を実施するがその課題は先におこなわれた課題と全く同じ形式、同じ題数で、同様に20分で回答することなどが説明された。また、やり方も同じであり特に説明はしなかったが、質問のみ受け付け、そのまま試行に入った。

20分経過後、終了の合図を行い、実験が終了したことが告げられた。そして、実験内容に関する説明が行われた。また、解決不可能群の被験者には、前処置課題の算数課題に正答のないものが含まれており、平均的な大学生ならば誰でも十分に正答できるとされた教示も事実ではないことが説明された。最後に、実験参加の謝礼が支払われ、すべての手続を終了した。

結果と考察

217名中、10名(男子6名, 女子4名)については、回答

に不備があったため集計から除かれ、207名が分析の対象とされた。

分散分析による分析

全被験者は、EASQの3次元の得点を合計した得点の平均値($M=314.92$, $SD=36.46$)で2分され、平均値より高い得点の被験者を抑うつ群、低い被験者を非抑うつ群とした。そして、テスト課題の遂行成績、状態不安、抑うつ感、敵意・怒りの各情動の評定尺度、正答率の判断の評定尺度、正答率の期待の評定尺度のそれぞれについて、前処置課題の群分け(解決可能・解決不可能) $\times$ 帰属スタイル(抑うつ・非抑うつ)の2元配置の分散分析を実施した。なお、状態不安、抑うつ感、敵意・怒りの3指標は、実験の前後での変化をみるため、前処置課題終了時の得点から実験開始前の得点を減算した値を用いた。

また、原因帰属の評定値に関しても、同様の2元配置の分散分析を実施した。しかし、この帰属の評定に関しては、成功感の評定で「よくできなかった」「どちらかといえばよくできなかった」の何れかに評定したものに限ってなされたため、分析の対象にされた人数が他の指標とは異なる。なお、成功感の評定のみは分散分析を実施せず χ^2 検定を実施した。

以上の結果については、TABLE 4~TABLE 5に示す。

テスト課題の結果 テスト課題の結果について解決不可能群は、解決可能群よりも有意に低い得点を示した($p<.01$)。この結果は、解決不可能な前処置課題を与えられた被験者が、解決可能な前処置課題を与えられた被験者に比べ後続のテスト課題での遂行成績が低下することを示したものであり、LH効果が確認された。しかし、帰属スタイルの主効果、および、群分けと帰属スタイルの交互作用は有意ではなかった(それぞれ, $p=.84$; $p=.14$)。この結果を見る限り、抑うつ的な帰属スタイルをもつ被験者が、対処不可能な失敗の経験によって、抑うつ的な帰属スタイルをもたない被験者よりも、LHに陥りやすいという仮説は支持されなかった。

情動の評定尺度 次に、前処置課題の前後での情動の変化の分析結果であるが、状態不安に関しては、前処置課題の群分け主効果のみ有意であったが($p<.001$)、帰属スタイルの主効果、および、交互作用は有意でなかった(それぞれ, $p=.78$; $p=.16$)。また、抑うつ感に関しても同様に、群分けの主効果は有意であったが($p<.01$)、帰属スタイルの主効果、および、交互作用は有意でなかった(それぞれ, $p=.58$; $p=.75$)。さらに、敵意・怒りに関しても、群分けの主効果のみ有意で($p<.001$)、

TABLE 4 分散分析の結果

			解決可能群		解決不可能群		群分けの 主効果 F 値, 確率	帰属スタイル の主効果 F 値, 確率	交互作用 F 値, 確率
			抑うつ群 (N = 45)	非抑うつ群 (N = 54)	抑うつ群 (N = 54)	非抑うつ群 (N = 54)			
テスト課題の得点		M	31.62	30.24	27.33	28.39	13.68**	.04	2.15
		SD	5.84	5.15	6.06	6.65			
正答率の判断の評定		M	6.40	6.60	3.30	3.60	137.96***	.89	.05
		SD	21.57	20.67	14.16	17.13			
主観的成功感			(TABLE 5 を参照)						
			(N = 26)	(N = 33)	(N = 51)	(N = 52)			
帰属の評定	内在性次元	M	5.89	5.79	5.96	5.35	.58	2.20	1.17
		SD	1.45	1.41	1.43	1.53			
	安定性次元	M	6.23	5.58	6.35	5.52	13.38***	.03	.19
		SD	.86	1.35	1.09	1.45			
	全体性次元	M	5.23	4.88	4.69	3.77	8.80**	5.18*	1.03
		SD	1.63	1.73	1.57	1.83			
			(N = 45)	(N = 54)	(N = 54)	(N = 54)			
正答率の期待の評定		M	63.33	64.82	38.61	42.32	104.00***	1.26	.23
		SD	16.55	18.93	14.65	15.80			
情動の評定	状態不安	M	3.42	4.87	11.04	8.89	21.31***	2.04	.08
		SD	7.88	9.24	9.12	9.64			
	抑うつ感	M	-.22	.06	.94	1.02	11.27**	.31	.10
		SD	2.53	1.79	1.97	2.73			
	敵意・怒り	M	1.33	1.54	4.02	3.09	14.59***	.40	1.04
		SD	3.34	3.71	4.63	4.03			

***; $p < .001$ **: $p < .01$ * : $p < .05$ TABLE 5 χ^2 検定の結果

	「よくできた」	「どちらかといえはよくできた」	「どちらかといえはよくできなかった」	「よくできなかった」
解決可能群	8	32	42	17
解決不可能群	0	5	23	80

df=3 $\chi^2=73.92$ $p < .001$

帰属スタイルの主効果, および, 交互作用は有意でなかった (それぞれ, $p = .52$; $p = .31$).

以上の結果は, 前処置課題において, 解決不可能な課題を与えられた被験者は, 解決可能な課題を与えられた被験者に比べ, 前処置課題によって, 状態不安, 抑うつ感, 敵意・怒りを高めていたということになる。しかし, ここでも帰属スタイルの違いによる差は見いだせなかった。

正答率の判断の評定 正答率の判断の指標に関する結果も, 同様に群分けの主効果のみ有意で ($p < .001$), 帰

属スタイルの主効果, および, 交互作用は有意ではなかった (それぞれ, $p = .35$; $p = .83$)。以上の結果も他の指標の場合とほぼ同じである。

成功感と原因帰属の評定と前処置課題 成功感関連についての χ^2 検定の結果は, 有意であり ($p > .001$), 解決不可能群は可能群に比して, 課題がうまくできなかったと評定していたことがわかる。このうち「よくできなかった」「どちらかといえはよくできなかった」とした被験者の原因帰属の尺度についても同様に分散分析を実施した。

その結果, 内在性次元に関しては, 群分け, 帰属スタイルの主効果, および, 交互作用ともいずれも有意ではなかった (それぞれ, $p = .45$; $p = .14$; $p = .28$)。また, 安定性次元に関しては, 帰属スタイルの主効果のみ有意で ($p < .001$), 群分けの主効果, および, 交互作用は有意ではなかった (それぞれ, $p = .87$; $p = .66$)。抑うつ的な帰属スタイルをもっている被験者は前処置課題が解決可能であっても不可能であっても, 前処置課題の経験によってその失敗の原因を安定的な次元に帰属する傾向

があることがわかる。さらに、全体性次元に関しては、群分けの主効果および、帰属スタイルの主効果が有意であったが(それぞれ、 $p<.01$; $p<.05$)、交互作用は有意ではなかった($p=.31$)。抑うつ群の被験者が、前処置課題の解決可能、不可能に関わらず、前処置課題の経験によって失敗の原因をより全体的な次元に帰属する傾向が見られたことは、安定性次元での結果と類似したものであるといえる。しかし、全体性次元では、解決可能群が、解決不可能群よりも失敗の原因をより全体的な次元に帰属していることが注目される。この結果は、改訂 LH 理論が予測するところと正反対のものだからである。しかし、これは、解決不可能群の被験者が防衛的帰属を行ったとみることによって、解釈が可能であろう。すなわち、解決不可能な課題を経験した被験者は、前処置課題の失敗が明白なものであり、自分の能力が不足しているのではないかという脅威を受けることになる。このとき、被験者は防衛的な動機づけを働かせ、このような失敗をもたらす原因が生活のすべての場面に関わるものではないという帰属を行うのである。その結果、解決可能群の被験者の方が、不可能群の被験者よりも、より全体的な次元に帰属するという結果がみいだされたと考えられるのである。また、本実験における前処置課題は約20分程度のものであり、その間に解決不可能群の被験者に生活の全ての場面にまで関わる抑うつ感を生起させることは事実上無理である。したがって、解決不可能群の被験者が、前処置課題の経験によって引き起こされた LH を実験内のことに限定しようという帰属過程を働かせたことは十分に考えられるのである。

正答率の期待の評定 正答率の期待の評定に関しては、群分けの主効果のみ有意であり($p<.001$)、帰属スタイルの主効果、交互作用は有意ではなかった(それぞれ、 $p=.26$; $p=.63$)。この結果は、正答率の判断など他の指標とほぼ同じものである。

以上の、結果を見る限り、前処置課題の群分けの効果は、テスト課題を始め、情動、正答率の判断、期待などの諸指標に効果を与えていたが、帰属スタイルが抑うつ的であるかどうかは、LH 効果の生起にほとんど差異を与えていなかったといえる。しかし、改訂 LH 理論によれば LH が形成される過程において帰属スタイルが与える効果は、「対処不可能性の経験→対処不可能性の知覚(判断)→原因帰属→将来の対処不可能性対にする期待」という一連の過程の流れを通して与えられるものである。ところが、ここまでの分散分析による分析法ではこうした因果関係の連鎖は必ずしも明

らかにできない。したがって、次に、探索的な方法ではあるが、パス解析を用い、本実験における「前処置課題→正答率の判断→原因帰属→正答率の期待→テスト課題」という一連の流れを、改訂 LH 理論生起の図式になぞらえて分析を試みることにする。

パス解析による分析

パス解析による分析は、解決不可能群の被験者のみ実施した。解決不可能群のみ実施した理由としては、①解決可能群では成功感の評定で「よくできた」「どちらかといえばよくできた」と評定したものが多く、原因帰属の評定を行わなかったものが多く、分析の対象とする被験者が少なすぎる。②そもそも、LH 理論自体が対処不可能な失敗の経験によって引き起こされる効果を問題とした理論であり、解決可能群の分析は意味が薄いものと考えられる、ことなどが上げられる。なお、解決不可能群のうち成功感の評定において「どちらかといえばよくできた」と評定した5名は分析から除いたため、103名が分析の対象となった。

パス解析は、帰属スタイルを第1水準、前処置課題の遂行成績を第2水準、正答率の判断を第3水準、原因帰属を第4水準、正答率の期待を第5水準、テスト課題の遂行成績を第6水準し、逐次法により単方向の因果関係を仮定した。したがって、重回帰分析は、①前処置課題の遂行成績を基準変数とし、帰属スタイルの3つの次元を説明変数とするもの、②正答率の判断を基準変数、帰属スタイルの3つの次元と前処置課題の遂行成績を説明変数とするもの、③原因帰属の3つの次元のそれぞれを基準変数とし、帰属スタイル、前処置課題の遂行成績、正答率の判断を説明変数とするもの、④正答率の期待を基準変数とし、帰属スタイル、前処置課題の遂行成績、正答率の判断、原因帰属の各次元を説明変数とするもの、⑤テスト課題の遂行成績を基準変数とし、帰属スタイル、前処置課題の遂行成績、正答率の判断、原因帰属、正答率の期待を説明変数とするもの、のそれぞれを実施した。

結果を、TABLE 6 に、また、有意なパス係数を FIG. 1 に図示した。

帰属スタイルのうち何等かのかたちでテスト課題の遂行成績に関連していたのは安定性次元のみであった。すなわち、失敗の原因を安定的な次元に帰属する傾向のある被験者は、解決不可能な課題の失敗の原因を安定的な次元に帰属し($.27, p<.05$)、また、その原因帰属が将来の正答率への低い期待と関連していた($-.23, p<.05$)。そして、正答率の期待の低い者ほどテスト課題の遂行成績が低く LH に陥りやすいことが確認された。

TABLE 6 パス解析の結果

	前処置課題の成績	正答率の判断	原因帰属			正答率の期待	テスト課題の得点
			内在性	安定性	全体性		
帰属スタイル	内在性	.02	-.02	.25*	.11	-.02	-.08
	安定性	.01	.12	.06	.27*	.13	-.05
	全体性	.03	-.11	.02	.11	.14	-.02
前処置課題の成績		.54***	.12	-.09	.14	-.01	.31**
正答率の判断			-.04	.01	-.11	.59**	-.14
原因帰属	内在性					-.08	.06
	安定性					-.23*	-.05
	全体性					.10	-.12
正答率の期待							.26*
重相関係数	.04	.55***	.30*	.39**	.26	.65***	.44*
決定係数(R ²)	.001	.30***	.09*	.16**	.07	.43***	.19*

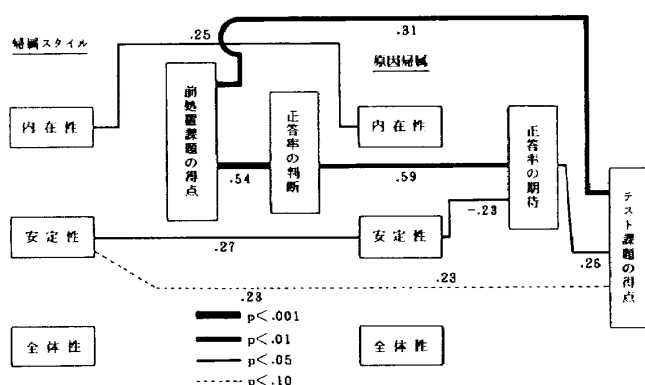
***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$ +: $p < .10$ 

FIG. 1 パスダイアグラム

(.26, $p < .05$)。一方、内在性次元は、帰属スタイルと原因帰属の評定の間には有意なパス係数が見いだされたが (.25, $p < .05$)、それが期待を通してテスト課題の遂行成績と関連していることはなかった。また、全体性次元に関しては、帰属スタイル得点は LH 効果の生起にはほとんど関連していなかった。改訂 LH 理論で提起された内在性次元の妥当性を疑問視する見解はこれまでも数多くみられ (たとえば, Peterson, Villanova, & Raps, 1985), 本実験の結果もそれを裏づけるものである。一方、全体性次元に関しては、分散分析の結果において、改訂 LH 理論から解釈するよりも防衛的動機づけの考えから解釈することが妥当であると考えられた。したがって、パス解析による分析において、有意なパス係数が見いだされなかったこともやむをえない。な

お、有意なパス係数は見いだされなかったが、帰属スタイルの安定性次元とテスト課題の遂行成績との間に正の有意な傾向のあるパス係数が存在する可能性が見いだされた (.23, $p < .10$) ことは注目に値すると考える。なぜなら、このパス係数によれば失敗の原因を安定的な次元に帰属する帰属スタイルを持つ被験者ほどテスト課題の遂行成績が促進する可能性が考えられるからである。したがって、本実験の結果を解釈するなら、失敗の原因をより安定的な次元に帰属するスタイルをもつ被験者が解決不可能課題の経験によって、失敗の原因を安定的な次元に帰属した場合は、期待を介してテスト課題の遂行成績に抑制的に働くものの、そのような帰属が行われなかった場合には、帰属スタイルは、逆に、テスト課題に対して促進的に作用する可能性が示唆されるのである。とはいえ、より抑うつ的といえる帰属スタイルをもつ被験者の課題遂行が促進するという結果は、LH 理論をはじめとした抑うつに関する一般的見解に合致する結果とはいえない。しかしながら、これまでのわが国における研究結果をみる限り、抑うつ傾向の高い者が課題遂行を低下させず、促進させた例は少なくない (たとえば, 園田, 1989)。ただし、本実験を含め、こうした実験では、LH を生起させるための処置なども必ずしも欧米の研究と同一の手続をとっているとはいえないので、この違いが、手続によるのか、もしくは、何等かの文化的な差異によるものなのかは、明らかではない。今後は、欧米での研究結果との厳密な比較検討を目的とした研究がなされることも、望まれてくるのである。

結 論

本研究は、改訂 LH 理論の実験的な検討を行った。その結果、解決不可能な課題をあたえられた被験者は、解決可能な課題をあたえられた被験者に比べ、テスト課題の遂行成績が低下し LH 効果が確認された。しかし、帰属スタイルについては、安定性次元以外は LH 効果の生起に影響を与えていなかった。さらに、LH 効果の生起と関連が見られた安定性次元に関しても、失敗の原因を安定的に帰属する傾向が原因帰属の評定、期待を通してテスト課題の成績を抑制する一方、直接的にはテスト課題に促進的に作用する可能性も示唆された。より抑うつ的な者が課題遂行を促進させることはわが国の研究ではこれまでも指摘されており、このわが国における研究結果の特徴については、欧米の研究結果との厳密な比較検討を加える必要性が考えられた。

また、最後に、LH 理論を実験的に検討するにあたっては、実験者は、倫理的な問題に十分留意しなければならないことも付記したい。なぜなら、実験的に LH を引き起こす場合、しばしば、被験者に嫌悪的な体験を強いることになるからである。これからの研究はこうした問題点の解決につながる方法の開発も必須になってくるのである。

引用文献

- Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P., & Teasdale, J.D. 1978 Learned helplessness: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, 87, 49—74.
- Alloy, L.B., Peterson, C., Abramson, L.Y., & Seligman, M.E.P. 1984 Attributional style and the generality of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 681—687.
- 青柳 肇・大芦 治 1990 学習性無力感に関する研究 —その6 無力感尺度の妥当性再検討と認知的成分の直接的測定の試み— 早稲田大学人間科学研究, 3, 29—36.
- 青柳 肇・大芦 治・細田一秋 1991 学習性無力感に関する研究 —その7 解決不可能課題の経験が後の帰属および課題遂行に与える効果— 早稲田大学人間科学研究, 4, 1—7.
- Dweck, C.S., & Reppucci, N.D. 1973 Learned helplessness and reinforcement responsibility in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 109—116.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673—679.
- Metalsky, G.I., Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P., Semmel, A. & Peterson, C. 1982 Attributional styles and life events in the classroom: Vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 612—617.
- 成田健一・今田 寛・新浜邦夫 1990 EASQ (Expanded Attributional Style Questionnaire) を用いた帰属様式の測定 日本心理学会第54回大会発表論文集, 135.
- Peterson, C., & Seligman, M.E.P. 1984 Causal explanation as a risk factor for depression: Theory & evidence. *Psychological Review*, 91, 347—374.
- Peterson, C., Villanova, P., & Raps, C.S. 1985 Depression and attribution: Factors responsible for inconsistent results in the published literature. *Journal of Abnormal Psychology*, 94, 165—168.
- Seligman, M.E.P. 1972 Learned helplessness. *Annual Review of Medicine*, 23, 407—412.
- 清水秀美・今柴国晴 1981 State-Trait Anxiety Inventory の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, 29, 348—353.
- 園田明人 1989 抑うつの認知—学習説の検討(I)—抑うつ水準と課題遂行・認知スタイルとの関係 応用心理学研究, 14, 41—48.

(1991年10月21日受稿)